世間解　第三八四号
令和二年二月
発行　西法寺

念仏もうさるべし

ーお正月が終わってー

二月であります。有縁皆さまにはご本願のおはたらきの中「なんまんだぶ、なんまんだぶ…」とお念仏ご相続のことと存じます。

世情は新型のウイルスによる肺炎の問題で大変であります。まずは手洗いとうがいの徹底！。皆さまくれぐれもご用心いただきお大切になさってくださいませ。

さて、次のご文は本願寺の第八代蓮如上人のお言葉を中心に集められた『蓮如上人御一代記聞書』というお書物の一番最初に出てくるお言葉であります。

勧修寺村の道徳、明応二年正月一日に御前へまゐりたるに、蓮如上人仰せられ候ふ。道徳はいくつになるぞ。道徳念仏申さるべし。自力の念仏といふは、念仏おほく申して仏にまゐらせ、この申したる功徳にて仏のたすけたまはんずるやうにおもうてとなふるなり。他力といふは、弥陀をたのむ一念のおこるとき、やがて御たすけにあづかるなり。そののち念仏申すは、御たすけありがたさありがたさと思ふこころをよろこびて、南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏と申すばかりなり。されば他力とは他のちからといふこころなり。この一念、臨終までとほりて往生するなりと仰せ候ふなり。

『世間解』で数年に一度ご紹介するお言葉であります。本願寺から現代語訳は、勧修寺村の道徳が、明応二年の元日、蓮如上人のもとへ新年のご挨拶にうかがったところ、上人は、「道徳は今年でいくつになったのか。道徳よ、念仏申しなさい。念仏といっても自力と他力とがある。自力の念仏というのは、念仏を数多く称えて仏に差しあげ、その称えた功徳によって仏が救ってくださるように思って称えるのである。他力というのは、弥陀におまかせする信心がおこるそのとき、ただちにお救いいただくのであり、その上で申す他力の念仏は、お救いいただいたことを、ありがたいことだ、ありがたいことだと喜んで、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と申すばかりなのである。このようなわけで、他力というのは他の力、如来の本願のはたらきという意味である。この信心は臨終まで続き、浄土に往生するのである」と仰せになりました。

となっております。この度は詳しい内容をお聞かせいただくことはいたしません。何度も何度も読み返しお味わいいただきたい御文であります。その中でも私がとっても有り難いと思っているのが最初の「道徳はいくつになるぞ。道徳念仏申さるべし。」というお言葉であります。

京都の山科の近くに勧修寺という村がありました。そこに住んでいた道徳という方が明応二年（一四九三）というのですから蓮如上人は七十九歳のお歳でしょうか、元日に蓮如上人に新年のご挨拶においでになったのであります。

その時に蓮如上人がおっしゃったのが「道徳はいくつになるぞ。道徳念仏申さるべし。」というお言葉でありました。当時は数え年という年齢の数え方でありましたので、誕生と同時に一歳で、その後は一月一日をもって一つ歳が加わわったのであります。極端な話し、大晦日に生まれた赤ちゃんは次の日に二歳という勘定であります。お正月のご挨拶に来られた道徳に新年の挨拶をさておいて「道徳はいくつになるぞ。道徳念仏申さるべし。」ときっぱりとおっしゃってくださるのであります。浄土真宗は「なんまんだぶ、なんまんだぶ…」とお念仏ご相続させていただくことに尽きるのであります。阿弥陀さまの「お前さん必ず支えてるで、色んな事がやって来て色んなめにあって、色んな思いを持っていかねばならんけど、どんな事があっても支えてるから、その“いのち”をお念仏申しながら精一杯生ききってくれよ」というご本願が力となって私を包み支えお育てくださっているのであります。　私が「なんまんだぶ、なんまんだぶ…」とお念仏出来ているということはそういう阿弥陀さまのご本願のお力のあらわれなのであります。お正月、ご自身は次には八十を迎えるという歳の元日。「また、新しい歳を迎えさせていただいた。この次には八十になる。一日一日めぐまれた“いのち”をどのようにいただいていくのか…」という思いの中での蓮如上人の感慨が「道徳はいくつになるぞ。道徳念仏申さるべし。」というお言葉なのでありましょう。

合　掌